東海支部報

日本山岳会東海支部

No. 157　April.　1. 2019

発行　公益社団法人
日本山岳会東海支部
〒460-0014 名古屋市中区富士見町8-8 OMCﾋﾞﾙ
電話：052-332-8363　FAX：052-322-7924
郵便口座 00800-5-13749「日本山岳会東海支部」
銀行口座 三菱UFJ銀行 覚王山支店
普通1222073「日本山岳会東海支部」
編集　星　一男
印刷　㈱ 浅井隆文社

平成31年新年懇親会にて講演される花谷康広氏　本文P3参照

目　次

○平成31年新年懇親会報告　毛利邦男　2
○花谷康広さんの講演を聴いて　尾上　昇　3
○サンタ・ラマネパール山岳協会会長来訪　4
○学生強化プロジェクト「冬山プログラム」実施にあたって　高橋玲司　5
○登山学校第Ⅲ期特待生制度導入について　榊　將美　6
○東海岳人列伝（12）　西山秀夫　7
○東海支部の蔵書からの一冊⑲　石田文男　10
○読図とナヴィゲーション講習会　鈴木慎吾　12
○支部員だより　瀧根正幹　13
○東海支部俳壇　14
○支部友コーナー　金谷正起　15
○同好会コーナー　スケッチクラブ/古道・塩の道　16
○委員会報告　自然保護/山行　東海Youth/ボランティア/技術向上　18
○会務報告　毛利邦男　20
○ルーム日誌・会員異動　毛利邦男　22
○INFORMATION　23
○編集後記　星　一男

http://hp.jactokai.net/　E-mail room01@muse.ocn.ne.jp

平成３１年新年懇親会報告

総務委員長　**毛利邦男**

恒例の新年懇親会が参加者合計90名（内講演会のみ18名）を得て1月19日（土）17時から今池ガスビル8階『ガス燈』で開催された。

高橋支部長の年頭の挨拶

愛知県岳連会長安藤武典氏の祝辞

高橋支部長からの年頭の挨拶のあと来賓としてお越し願った愛知県岳連会長安藤武典氏からお祝いの言葉を頂戴した。

講演会

今年は2012年キャシャール峰（ネパール）南ピラーからの初登攀に成功し、その功績が評価され、2013年に第21回ピオレドール賞を受賞した花谷泰広氏をお迎えし、『登山文化の継承と発展』と題して講演をして頂いた。

内容の詳細は次頁に尾上常任評議員が「講演を聴いて」を寄稿しているので参照されたい。

インドヒマラヤ未踏峰（タシ・ラン峰）登頂報告

インドヒマラヤ未踏峰登頂報告会

講演の後を受け、今夏東海支部が派遣した星氏を隊長とする5人のインドヒマラヤ登山隊が昨年見事未踏峰登頂に成功したことから、画像を交えながら登頂の報告がなされた。

懇親会の口火を切る乾杯

懇親会

講演会と報告会終了後懇親会に移った。片岡副支部長の発声による乾杯の後、来賓の安藤武典氏、講演者花谷泰広氏、インドヒマラヤ隊の皆さん、来名中で飛び入り参加した富士山2000回登頂で有名な実川欣伸氏も交え和気あいあいの雰囲気の中、会場は大いに盛り上がった。又今年も九州在住の石原國利名誉支部員から送られてきた銘酒「黒田武士」も振る舞われた。最後は、東海学生山岳連盟の諸君の一本締めでお開きとなった。

花谷泰広さんの講演を聴いて

常任評議員　**尾上 昇**

今年の新年会の講演会の講師には、現代の日本のトップクライマーの一人である花谷泰広氏を招いた。その花谷さんの講演を聴いて、私自身いささか心に期するところがあったので筆を執らせてもらった。

先ずは、花谷さんの略歴を記そう。
1976年生まれ42歳。神戸市出身。山登りがやりたくて信大山岳部の門を叩く。大学１年生から信大のヒマラヤ登山隊に参加。卒業後もヒマラヤを含め世界の山々を巡る。特に未踏峰への思いが強くヒマラヤの未踏の峰の数々の頂にその名を刻んでいる。

2001年には、田辺 治(信大ＯＢ)隊長率いる東海支部の冬季ローツェ南壁登山隊の一員に加わっている。一時、東海支部に籍を置いていたこともあって支部にとっても大変馴染みの深い人である。2012年、ネパールヒマラヤキャシャール峰(6767m)の南ピラーからの初登攀に成功する。2013年にこの登山が高い評価を得て３人の仲間と共にピオレドール(※)賞を受賞している。昨年10月には、ＮＨＫＴＶの“グッと！スポーツ”に出演、一躍時の人となる。

現在は、山岳ガイド業を中心にした山岳イベントの企画、運営する会社を設立。甲斐駒の七丈小屋の管理を請け負うなど忙しい日々を過ごしている。またその一方で、若い人材の育成に力を注いでいる。ヒマラヤを目指すクライマーの育成が目的のヒマラヤキャンプである。

講演の題名は“登山文化の継承と発展”である。それを聞いたとき、いささか花谷さんには似付かわしくない題のような気がして、少々訝った。今は、このことを大いに恥じている。

講演は、先ずは花谷さんのこれまでの数々の輝かしい登攀歴の紹介からはじまる。ヒマラヤの峰々の初登頂や未踏の尾根や壁からの登頂。アンデスやマッキンリーの難ルートの登攀。いずれも意欲的で挑戦的な山との戦いにすっかり魅了されてしまう。特にピオレドール賞を取ったキャシャールの南ピラーからの厳しい登攀の様子を映し出す動画は、一同

講演をする花谷氏

を瞠目させるのに充分余りあるものがあった。

後半は、花谷さんの主宰するヒマラヤキャンプの話が中心となる。何故、花谷さんがヒマラヤキャンプを主宰するようになったのか。目的は、先述したように若い人材の育成である。ヒマラヤニストの育成である。その背景には、花谷さんの日本の登山界に対する深い憂慮と強い危機感があるからである。

現在の日本の登山人口は、700万人とも800万人ともいわれていて世界の中でも屈指の登山大国の一つである。一時、若者の山離れもいわれたが、最近では若い人を山で多く見掛けるようになり、日本の登山界を特別憂慮するような要因は見当たらないような気がする。

しかし、只一つ残念なことは、世界に通用する花谷さんのようなクライマーが、ほんの一握りしかいなくて、一般の登山との間の、余りにものギャップが激しいことである。このことだけならまだしも、花谷さんの憂慮は、次に続く若い人材が育っていない、誰もいないという現状にである。今のトップクライマーが引退すると、日本から世界に通用するクライマーはいなくなってしまうのである。

この現状に危機感を抱いた花谷さんは、自ら次世代のクライマーの育成に取り組んだ。従来、日本のクライマー(ヒマラヤニスト)のほとんどは、社会人山岳会や大学山岳部がその育成の任を担っていた。しかし現状は、社会人山岳会も大学山岳部も弱体化して、いわばクライマーの供給が途絶えてしまっているのである。

それは、ヒマラヤを例に取れば、毎年のヒ

マラヤに向かう日本隊の激減が如実に物語っていよう。昨年の支部の役員忘年会に、たまたま来名していたＮＭＡ（ネパール山岳協会）のサンタ・ラマ会長が飛び入りで参加してくれた。そのサンタ・ラマ会長が、カトマンズで日本の登山隊の姿をめっきり見なくなってしまった。どうなっているのかと心配していた。他の国の登山隊は、これまでと変わっていないのにと。

花谷さんのヒマラヤキャンプは、昨年で３回目となる。隊員を全国から公募。面接の末、６名を選抜。この６名の若者と共にヒマラヤの未踏峰を舞台にヒマラヤキャンプを実施している。個人負担金は、一人当り30万円、それに別途カトマンズの往復航空運賃が加わる。しかしそれだけでは、とても足りないので、不足分の数百万円は、花谷さんの主旨に賛同した企業10社余りと個人から支援を受けている。これも花谷さんの孤軍奮闘である。実に頭が下がる。

選抜したといっても隊員の経験や実力には差がある。この差を埋めるために花谷さんは、国内で月に１度のペースで事前合宿を行っている。ヒマラヤ登山に必要な知識の取得とスキルアップである。合宿の中に冬の北鎌が入っている。花谷さんは、日本の厳冬期の厳しいルートを熟す力があれば、ヒマラヤでも充分通用する。むしろ日本の冬山の方が厳しいと言う。このことは、昔から言われていて、私も私の経験から間違いないことだと申し上げられる。かつての社会人山岳会や大学山岳部が、厳冬の厳しいルートを競って挑んできていたのが、今は昔の話となり何とも寂しい限りである。

花谷さんは、今後もヒマラヤキャンプを続けるという。そして最後にこう締め括った。社会人山岳会や大学山岳部に期待できなくなっている今日、こうしたプロジェクトは、個人では限界があり日本山岳会のような大きな組織がその責を負うべきである。このままでは、日本の登山界は、世界に置いてき堀を食う。このままでは、日本の登山界は近い将来消滅する。何とかしなければ、と、ちらりと私の方を見ながら断言した。

私は、思わず羞恥心から身を縮めてしまった。そして同時に花谷さんの熱い想いに強い共感も覚えた。

その後の懇親会でもその後の二次会でもヒマラヤキャンプの話が続いた。その中で花谷さんは、「もし日本山岳会がヒマラヤキャンプに興味があるなら、やる気があるなら、私自身その中に飛び込んでプロジェクトを進めてもいい」とまで言ってくれた。

これが花谷さんのいう“日本の登山文化の継承と発展”である。私は、花谷さんのこの熱い想いを知らん顔をして放っておくのは、日本山岳会の一員としてとても耐えられるものではないとの強い思いに駆られた。

私は、早速このことを日本山岳会本部に提案することを心に決めたのである。

※ピオレドール賞＝フランスの山岳誌が主宰する年間の世界で最も評価の高い登山に送られる賞（ピオレドール＝金のピッケル）。日本人は、これまでに４チームが受賞している。

サンタ・ラマ ネパール山岳協会会長　来訪

ネパール山岳協会のサンタ・ラマ会長が、支部の常務委員会の忘年会に飛び入り参加した。サンタ・ラマ会長は、たまたまこの日（12月26日）に名古屋に来ていて、常務委員の幾人かと面識があったことからお誘いしたもの。その気さくな人柄と、日本語が堪能なことから、賑やかな交流の輪が広がった。

サンタ・ラマ会長は、今期よりネパール山岳協会の新会長として就任されている。一方で、サンタ・ラマ会長は、カトマンズ近郊でコーヒー農園を経営、エベレストコーヒーというブランドでコーヒー豆を焙煎、販売している実業家でもある。土産に持参したエベレストコーヒーは、全員には行き当たらないのでジャンケンで配られた。来日の目的は、こ

サンタ・ラマ、神崎、今田各氏とルームにて

のエベレストコーヒーの販促で、来名もその一環である。

又、サンタ・ラマ会長と行動を共にしていた日本山岳・スポーツクライミング協会の前会長神崎忠男さんと本部総務委員長の今田明子さんも忘年会に参加された。

学生強化プロジェクト
『冬山プログラム』実施にあたって

支部長　**高橋玲司**

昨年から始めた東海学生山岳連盟(以下連盟)の学生強化プロジェクトの一環である冬山プログラムは、今年も継続して実施している。事の始まりは、2年前の秋の総会である。山の話をしていたら何と、冬山経験者が皆無なのである。衝撃であった。

原因は、大学山岳部の衰退と指導体制の低下である。東海地区で山岳部として残っているのは、岐阜大と愛知学院大の2校だけである。しかもこの2校、連盟の活動にはほとんど参加していない。そのほか山岳部復活を目指している同好会の南山大アルパインクラブ、名工大山岳同人鶴、大同大アウトドアクラブとワンゲルの名大ワンゲル部、岐阜大ワンゲル部などが主な連盟の構成校である。こうした中、向上心のある学生がいても単一大学内では指導者がいないことから冬山などの山行は、不可能である。

現在、東海支部は、登山学校の開校や自然保護、ボランティアなど多種多様な取り組みで『山』のすそ野を広げる活動を行っている。一方で、私が支部長として掲げたトリプルワンの目標『安全第一、一体感を持つ、ＮＯ１を目指す』の中で、東海支部の設立時からの伝統であるヒマラヤ登山を主とする世界のＮＯ１を目指す為の、人材育成の取り組みがきちんと行われていないのも現実である。登山はスポーツであり、支部を担う次世代の若者を世界的な登山を目指し輩出していく事は、魅力あるスポーツとして大変有意義なことである。

今、連盟の若き学生に冬山をはじめとする総合的な登山技術を教えなければ、その灯も消えてしまうと感じた。

そこで連盟ＯＢでヒマラヤ経験者や登山界で活躍する若手の連盟理事を中心にコーチ陣を配しプログラムをスタートした。昨年は7名の参加により、連盟加盟の学生のスキルアップに繋がった。今年も昨年10月26日から始動した。今年は1年生を含む学生11名が名乗りを挙げてきた。

新穂高で雪訓に挑む学生

基本は学生である。カリキャラムや準備する課題を自分達で解決していく。毎週木曜日に全員で話し合い、議論を重ね議事録はコーチを含めたライングループで展開していく。山行計画もその都度ラインで報告連絡相談、合わせてコーチによる助言も加わる。山に行く時の写真、ドヤ顔も送ってくる。楽しく懸命に行う姿は微笑ましい。

目的は、泥臭い山岳部的な登山技術の修得である。重い荷物を背負ってラッセルを行う。雪山でテントを張りメシを食う。そして長期の雪山山行に耐えるパワーを身に付ける。

今年は昨年支部員各位からいただいた装備を分けてしまい、装備が不足している。現在の学生は、景気の悪化や学費の高騰もあり、必ずしも装備にかける資金が潤沢ではない。ビーコンなどは高くて手が出ないので、支部の厚意で賄う事とした。今後も不必要な装備のご提供をお願いしたい。

主な活動状況

2月3日　経ケ岳　　2月9,10日　大日ヶ岳
2月16,17日　八ヶ岳　2月24日　野伏ヶ岳
2月27日　藤原岳

登山学校第Ⅲ期　特待生制度導入について

登山学校運営委員会委員長　榊 將美

１．はじめに

登山学校も第Ⅰクール(2017年7月～2020年6月)の第Ⅲ期を向かえるにあたり、受講生の自立した登山者たる更なるレベルアップと、入校年次から3年間を一括りとして卒業することから支部員への移行措置を図ることが求められる。また、第Ⅱクール(2020年7月～2023年6月)に向けて、次世代リーダーの育成が急務であり、指導員の若返りと充実した体制づくりのため後継者を「育成する」仕組みが緊要である。そこで第Ⅲ期に特待生制度の導入を図ることとした。以下に概要を報告する。

2. 特待生の条件と範囲

(1)現地講習および机上講習出席率等の受講態度が他の模範たる者。
(2)特待生候補者は2020年7月より東海支部支部員に移行することを条件とする。
(3)特待生候補者は指導員候補および事務局員候補とする。
(4)特待生候補者は第Ⅲ期の登山学校年会費を免除する。

3. 特待生候補者の推薦から承認までの流れ

(1)特待生候補者は自薦および他薦とする。
(2)第一次審査（書類審査）
・現指導員は特待生候補者に条件を確認後、特待生推薦状を提出する。
・特待生候補者推薦は現指導員の教室およびクラスを問わない。
・登山学校運営委員会にて審議・承認を得る。
・自薦者は別途書式を提出し登山学校運営委員会にて承認を得る。
(3)第二次審査（現地審査）
・第一次審査合格者は別途企画する山行にて第二次審査を受ける。
・登山学校運営委員会にて審議・承認を得る。
・現地山行審査員は別途編成する。

4. 育成カリキュラム

(1)後継者育成プログラムおよびスキルマップを作成する。
(2)特待生は指導員補助および事務局員補助として経験を積むため、後継者育成プログラムおよびスキルマップに準拠して活動する。

5. 終わりに

支部員の皆さん、登山学校運営委員会へのご参加を歓迎いたします。

特待生制度のプログラム

	３月	４月	５月	６月	７月
承認	第一次承認	第一次承認	第二次承認	第二次承認	
第一次審査	推薦 →	推薦 →			
第二次審査		山行 →	山行 →	（予備） →	
第Ⅲ期補助活動開始			プログラム＆スキルマップ検討・作成	受講生補充募集	補助活動開始 →

東海岳人列伝(12)
～人生は太く短く・国島陽三～

編集委員会　**西山秀夫**

国島陽三（1933～1995）さんとは、筆者が初めて社会人山岳会に入会した28歳のとき、愛知県岳連理事長の任にあった。愛知県岳連でバス2台を仕立てて、富士山氷雪技術講習会に参加したとき、全国から約2000人の登山者が集結、日本で始めて積雪した斜面で滑落停止の訓練を受けた。他の会で4名の死者が出た。夜通しサイレンが鳴り、パトカーや救急車が入れ代わり立ち代り出入りした。2日目の晩のテント内で酒を飲んで談話を楽しんでいた。豊川山岳会のテントに同宿させてもらった。テントを覗いて国島さん曰く「お前らな、今日だけで4人も死んだんだぞ、酒飲んでいる場合か」と激しくたしなめられた。他のテントへ次々と注意喚起の言葉が聞こえてきた。理事長としての責任を痛感してのことであった。そんな断片的な思い出があるだけであった。

そこで岳連の幹部の方に所属していた名古屋山の会の丸田常任委員（当時）を紹介してもらった。

丸田氏はさらに親しかった鈴木茂三氏に転送して思い出を書いていただくことになった。多忙な中、締切直前にもかかわらず、玉稿をお寄せいただいたお二人のお骨折りに深謝する。

以下は筆者が下手な編集をするよりもそのままで転載することとした。適宜（注）は入れた。

****

「人生は太く短く！」

・・・・・国島　陽三先輩の思い出

名古屋山の会　会員

日本山岳会東海支部会員

鈴木　茂三

私は、昭和33（1958）年4月名古屋山の会に入会しました。この頃の名古屋山の会は、スキーとハイキング登山のレベルだったそうですが、私の入会する2年程前に、名古屋YMCAから国島先輩ら2人が移籍して名古屋山の会に入ってこられたそうです。そこで名古屋山の会は、昭和33年度から一般会員を募集することになり、「岳人4月号」に新人募集広告を出しました。そのころ会社の同僚に誘われ小屋泊りで穂高岳縦走を経験し、急速に山に傾斜して行った私は岳人の広告を見てすぐに応募しました。

冬山・岩登りなど危険な山は避けたいと思っていた私は、なんとなく優しい登山が約束される名前の「名古屋山の会」に応募することになりました。同期生は10人以上いたように記憶しております。

ところがこの時すでに国島先輩が入会されていて、いきなり鈴鹿の藤内壁で岩登りの訓練からはじまりました。8月は穂高岳の岩登り、秋は中央アルプスの沢登り、冬は鹿島槍などが年中行事になり、いつも国島先輩がリードしてくれました。

そんなこんなで数年がたちこの私でもいつの間にか本格的な山登りを目指すようになりました。

ところが、昭和37（1962）年に会社の都合で関東へ転勤になり、名古屋山の会の山行は、春、夏、冬の３合宿しか参加できなくなりました。

国島陽三氏 1961年夏山合宿涸沢にて

昭和39（1964）年夏合宿は、剣岳の集中登山となり、私も東京から夜行列車に乗って参加しました。この頃から私の同期入会の多くは結婚して山から遠ざかり、山の会の中心メンバーは後輩たちに変わっていましたが、それでも剣岳八ツ峰に新人を連れて登攀する役

目をもらいました。
国島さんは、「鈴木。お前はお袋が亡くなって間もないのであんまり無理するな」と言ってバリエーションルートの登攀をさせてくれません。この5月私は名古屋に残した母を亡くしていたのです。
その翌日、国島先輩は、「鈴木。今日は俺に付合え」といって仙人池へハイキングに行くことになりました。

剱岳頂上の国島陽三氏（夏山剱合宿にて）

（夏山剣合宿）
せっかく剣へ来たのになんで仙人池？とは思いましたが、今から思えば一生一度の仙人池だったし、国島先輩と二人だけの山行も初めてのことでした。
快晴の仙人池を散策して、仲間の待つ剣沢ベースキャンプへ帰る途中に、国島さんは「今度平松がダウラギリ遠征に参加するらしい」と一言だけいいました。
平松和男先輩は、名古屋山の会のもう一人のリーダーでした。国島さんと同じ三菱重工の社員で、今回の遠征は名古屋山の会からではなく三菱山岳会からの遠征ということになりました。
国島さんはこれ以上なにも言いませんでしたが、今から思えばなんとなく心中察するところがあります。このころは一般山岳会でもヒマラヤ登山が夢ではなくなりつつありました。
数日間の合宿が終わり、一行は早月尾根を下って富山方面へ下山しました。富山駅に早く着いたので、他の会員たちは昼汽車で帰りましたが、私だけは列車の連絡が悪く夜行で帰ることになりました。国島先輩は私に付き合って夜行で帰ると言い出して、富山駅近くの居酒屋で酒盛りをすることになりました。
いろいろ話をしてさんざん飲んでその挙句の先輩の言葉は、「鈴木！人生は太く短くだぞ！」。
若いころは3回戦ボクサーだったこともある国島さん。その豪快な人生の最後に面会したのは沢上の三菱病院でした。お見舞いのメロンを持参しましたが、「気持ちはうれしいが、持って帰ってくれ」と・・。死ぬ間際まで自分のことより人を気遣う人でした。国島さんの訃報を知ったのは飯豊山を登山中でした。
国島先輩　！
短かったけど太くて豪快な人生でしたね。
****
「死ぬ間際まで自分のことより人を気遣う人でした」というところに国島さんの真骨頂があるのです。日本山岳会へは1971年10月、原真と熊沢正夫の紹介で入会。7270番。
「支部報」（Ｎｏ61　Ｏｃｔ.10 1995）に、横田明信さんの追悼文があります。そこからちょっと引きますと、「昭和42年に33歳の若さで愛知県岳連の理事長に推され」たのです。続けて「国島さんは連盟をまとめるのに、誰にもいい顔をすることは決してなかった。言うべきことはずばりと言い、言ったことは徹底的にやりぬいた。当時は雨後の竹の子とのごとく山岳会ができ連盟へ加入、あれこれ教えろ、と連盟に甘えてきた団体の理事には恐ろしい存在であった」中略「以来亡くなられる今日まで、会社や家庭を犠牲にした岳連一

途の献身的な活動は、諸先輩の築いた愛知岳連の名を更に高め、日山協をして国島さんには一目置く存在となったことは皆さんの知るところであろう。名実ともに国島さんに華々しい山歴が少ないのは頷ける。常に黒子に徹したところが国島さんの偉大さである」と万感の思いを綴った。

追悼では華々しい山歴が少ない、と横田氏は書くが、「支部報」（ Ｎｏ．40 Ｄｅｃ．6 1988）に実年ヒマラヤ登山隊 ヤン峰（6230m）登頂の記事があった。その中に国島陽三（54歳）総指揮、梶田民雄（51歳）隊長、石川冨康（51歳）隊員、中世古直子（50歳）隊員とともに登頂している。1988年8月7日のことだ。

これは平均年齢が52歳という当時では世界初だった。この他に、鈴木常夫（52歳）、稲葉省吾（51歳、故人）、山口宏（51歳）、小島清子（54歳）、支援スタッフに金田博秋（39歳、体力測定）、本庄宏司（34歳、医師）、石原俊洋（39歳、中日新聞記者）とある。

国島陽三総指揮「初めての長期遠征で頂上を極めて何より。自分たちの体力などにあったヤン峰を選んだのは良かった」とのコメント。東海支部のインド・ヒマラヤ遠征に路を開いたのであった。

登山家の生涯で一度でも海外遠征でしかも登頂できれば幸なことである。

ヤン峰登頂の1次隊

愛知県山岳連盟が平成12（2000）年に編纂した『あゆみ60年』に国島さんの名前が初めて登場するのは前述したように昭和42年の理事長就任であった。昭和45年で理事長から新設した指導員総会開催に専門委員会の委員長に就任したことが分かる。理事長は谷口錫夫氏と交代した。このことから登山技術の理論家であったことが分かろう。昭和48年には理事長に再任された。昭和54年には御在所岳岩登り競技会の壮年の部で3位に入った。同55年には2位に入った。平成元（1989）年には副会長に選任。平成7（1995）年には顧問に選任。この年は「愛知岳連顧問・国島陽三氏逝去」の囲み記事で哀悼の意を表した。「8月3日午前3時ごろ、入院療養先の三菱病院で逝去された。昭和42年から45年、48年から57年と岳連理事長を務められ、岳連発展のため多大な盡（尽）力をされ、その功績は多とするものがあった」

尾上昇ＪＡＣ元会長は「長いこと岳連で頑張っていたじゃないか、あんなに長く務めた人はいない」と、自らも東海支部長を長く務めた人生に重ねて、国島さんを称えた。62年の今の時代には短い人生だったが、多くの後輩に慕われて幸福だったとも思う。

ヤン峰の頂上稜線を進む

東海支部の蔵書からの一冊⑲

図書委員会委員長　**石田文男**

『アルプ』　編集兼発行者・久保井理津男

今ここに手にしているのは『アルプ』196・200・300号の３冊である。この『アルプ』は文学的匂いを高みに見据えて発刊されてきただけに、人気のある月刊誌であった。

とりわけ山岳書としても読者に大きく影響を与え、その領分の一翼を担ってきたと言っても過言ではない。こんな想いからずっと気になっていて、予定の紹介本を変えてこの『アルプ』を手にした。

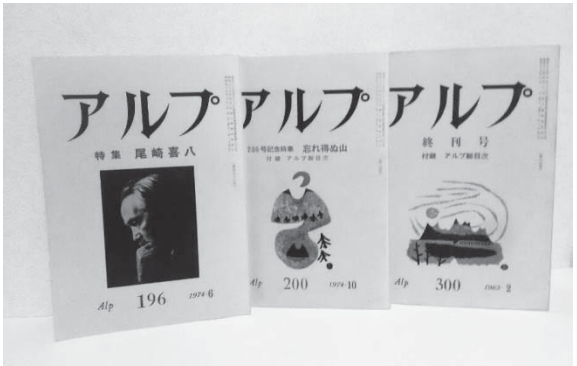
まず、196号の特集「尾崎喜八」からいこう。喜八は大正期に文芸誌『白樺』に多くの詩を発表、後に多大な詩文集・紀行文集を著している。中でも『山の絵本』は「まるで地理学書を読むような精緻な情景の描写により、多くの登山者を感動させた」（『山・自然探求』前川整洋著から引用）ようだ。

まず開いた目次の39人の執筆者とそのタイトルがすごい。文人と登山家が多く、文学の薫りたおやか。そして、どの項から読みだしても尾崎文学が漂いその読後感が透明だ。巻末に「尾崎喜八著作年譜」として27ページに亘り99の著作と主だった「自序・訳序文・あとがき」を多数紹介しているのは、一種圧巻で著作の全体を知る上にも重厚である。

因みに僕なんぞ、『山の絵本』に感化されて、結婚の旅行は小海沿線を巡る山と草原と牧場に空と雲と雪を飽くなき求めたことが昨日のように胸のうちをすぎてゆく。手前味噌になるが当時、この時のことを端書きして溜まっていたものを、最近整理していると懐かしさ半分、赤面半分になる。

『200号記念特集「忘れ得ぬ山」』

「・・・多くの山好きにとって山との出会いや宿縁はさまざまのはずである。〈忘れ得ぬ山〉とは、そういった山をいうのだろう」さらに、「登山者は老ゆるにしたがって、現実の山登りよりはなれて浪漫的におのれが所有する山登りの回想のたのしみに、そのおのおののふもとにおいて求めようとする。おそらく・・・その想い出ふかき峰のすがたの前に静かに座して彼らの最後の夕映えまでをたのしむのだろう」（大島亮吉からの引用）だと、《わが青春の「谷川岳」》を執筆した安川茂雄は述べている。



もしあなたの「忘れ得ぬ山は」と問われたら、誰しも登ってきた山の年輪に「山とその想い出」を廻らすことだろう。この200の執筆者もそれぞれのそれまでの山登りの中で、幾つもあるであろう「忘れ得ぬ山」を廻らしながら、その時の気分にも乗じて「この山・・・」をと、走らせているペンの音が聞こえてくる・・・。200はこんな特集号である。

編集室からの後記を引用してみると、「・・・100号を超えた時に、随分遠い先のように思っていたが、其の時がきた。その200号にふさわしいものとして「忘れ得ぬ山」を考えた。どんなに山行の数を重ねても、登った山、登れなかった山を忘れてしまう事はあり得ないのに・・・」の心像が伝わり、それぞれの依頼の執筆者に受け入れられたことが推察でき、かろやかな思いがする。

目次には「わが青春の山・穂高谷」（今井雄二）、「北岳・わが永遠の山」（白旗史朗）など38タイトルがある。

『300・終刊号』

読みはじめたら限がないが、二つ引用した。「今でも忘れられないのは、大洞編集長のこんな言葉である。〈編集者は表面に出ないほうがいい。無名でも才能のある人々を世に送り出し、その人が大成するのをみれば満足。編集長冥利とはそういうものだ〉伯楽の心境だが、山の芸術誌『アルプ』は思想・文学・

美術などの面で尾崎・串田ラインの確固とした筋を通じ、・・・。商業ベースの雑誌界に清冽な泉の爽やかさを残してきたと自負･･･。あれから25年が過ぎ・・・、26歳以後の少し遅ればせの青春のすべてが300冊の『アルプ』の中にあると思えば、今、その落日の刻を迎えて胸中に・・・。華麗な夕映えが天を染める瞬間をしっかり見決めたいと思う。」

二つ目は、「毎月『アルプ』がとどく毎に、日頃の生活･･･ほっと開放されて、さてと、心の和む思いがし、頁をめくる楽しさが心をいっぱいに山の姿でみたして・・・。『アルプ』はそんな人間の心を大切にしてくれた。･･･人と人との心の深い友情、山や、川や、田や、山村や、原野の持つ或る豊かさが、どんなに人間と関わり合うか、そういう自然に対しての深い思いやり、物を見、ありのままの姿の自分を見、そして人間の原点に立ち還って考えること、小さな一輪の野の花の中に宿る素晴らしい宇宙そのもの、無限に広がる人間の創造の世界が、山の中で如何に凝結されていくか、『アルプ』を読む毎に、山と自然と人間への、そんな想いを深くしたものだった。」

このような600人を超える執筆者があって、創刊された昭和33年から25年、300号を数えた月刊誌である。年に3回ほど編まれた「何々特集号」は楽しい読み物で、待ち遠しいものだった。次号予告の「尾根路、山小屋・・・」などその表題から執筆者・タイトルを想像するのは胸が弾んだ。もちろん，全冊何処から頁を繰ってもよし。その文学の漂うのを読んでいると、いつしかその世界に陶酔していく。不思議な力でもある。山はただ、がむしゃらに登る時期もある。が、その糧の欲求にぶち当たることもある。そんな時本に求めるのも一つの道か。『アルプ」はそんな時、容易く受け入れてくれる何かがある。

断片的あるいは連続的構想から発表されてきた執筆者の多くが、一本として纏め素晴らしい読み物、名著と言われる著書を出してきている。これも、この『アルプ』の果たしたところが大きい。例えば『山の出べそ』『北と南の話』、尾崎本、庄野英二本・・・など挙げると限がないが、数多の名著が生まれたのも、この『アルプ』が25年間、高みを見据えてきたからであろう。

例えば、『山の出べそ』の初稿は昭和37・8年に『アルプ』に連載されたものだが、今でも少しも古びておらず何度読み返しても笑いがこみ上げてくる。

毎号には創文社刊の数多の著書名が鏤められていて、見ているだけで楽しい。そんな中からその書名その著者名に惹かれて買い求めていく心の弾みはなんとも言えないものだ。好みもあるが名著と言われるに相応しいものが多く、私は畦地梅太郎本の画文集に吸い込まれていったものだ。

300号の巻末の54頁にわたる総目録は圧巻の一言である。まだ読んでいないのがどの位あるんだろうか。

10数年前、寄贈頂いた単行本のままのものを、ある委員が扱いしやすいようにと合本化して、禁貸の書棚に並んでいる。創刊時から購読・ファンという方も含めて、この文芸誌『アルプ』から、「自分の山登りとは何か」を思索するのも糧の一つであろうか。

昭和33年3月～昭和58年2月発行
A5版　50～324頁　（株）創文社

登山届を提出しましょう！

支部の山行（委員会が主管する山行、またはいずれかの委員会、同好会に属している会員の個人山行）は登山届と共に
＊リスクグレード表を添付して提出してください。
・リスクグレード１、２について審査します。(グレード３～は、審査機関で審査)

提出先は、
メールの場合　jactokai103@gmail.com
Fax(ルーム)　052-322-7924
留守番電話　080-2632-3776

・留守本部担当者は２名以上明記する。メール届は入山日時、委員会名もしくは個人山行、目的山域、リスクグレード、リーダー名を記載の事。

読図とナヴィゲーション講習会参加

技術向上委員会　鈴木慎吾

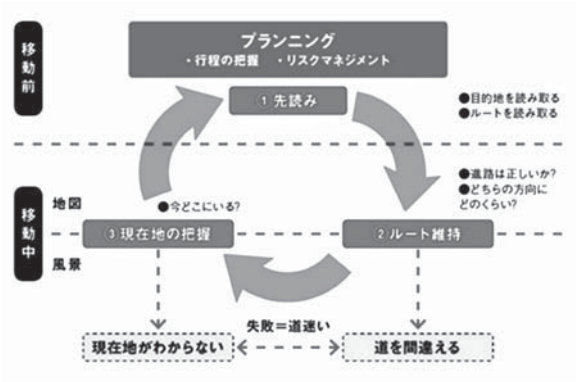
去る3月16日(土)～17日(日)、静岡大学教育学部教授　村越真先生を講師にお招きし、講習会を開催したので、以下報告する。

16日(土)　14:15～17:30

ＯＭＣビル大講堂にて、85名の参加者を得て開催された。先生は、全日本オリエンテーション選手権15連覇、通算22勝という前人未到の記録を持つオリエンテーション界の第1人者である。『山岳読図ナヴィゲーション大全』などの多数の読図に関する著書があり、また指に付けて使用するRa-shinというナヴィゲーション用のコンパスも開発されている。

講義風景

講義では、まず登山における道迷い遭難の実態の分析があり、登山者にとって、読図は安全登山のためには備えるべき必習の知識・技術であると強調された。さらに地形図記号と地図の約束事の説明があった。そして、ナビゲーションサイクル、すなわち①移動前のプランニング、②移動中のルート維持、③現在地の把握、の3ステップが上手く回ることが必要ということであった。コンパスの使い方の説明では「コンパスの基本は北が分かること」という説明が印象に残った。3時間以上という長い時間を忘れるような興味深い講演内容であった。



ナヴィゲーションサイクル

(2)現地講習　17日(日)　8:30～14:30

指導者クラス会員を中心として参加者19名により猿投山一帯を会場として開催された。雲興寺前に集合し、コンパスと地図の持ち方などの基本的な説明があった後、東海自然歩道～山桜コース～猿投山～小長曽陶器窯跡というコースを辿って現地実習が行われた。ポイントポイントでは地図とコンパスを使い、ルート維持のための進路方向や現在地の把握を細かく確認しながら歩いた。「木を見て森を見ず」の諺のように足元ばかりでなく遠くのスカイラインなど大局的な地形の確認も大切であるということであった。小雪も舞う寒い一日であったが、登山者が身に付けるべき安全登山のための読図とナヴィゲーションの知識・技術を学ぶことが出来た有意義な実地研修であった。

猿投山で実地研修

支部員だより

瀧根正幹

早期退職をして高山に移り、14年目を迎えた。その間、山岳会の集会の度に名古屋に行くのも大変で、千種アルパインクラブの代表も退いた。やがて60歳になったのを機に、40代から続けていた日本山岳協会専門委員（指導委員会常任委員）も辞めさせていただいた。「特に指導委員会は、現役で登っていない年寄りがいつまでも役員をやっていちゃダメだ」という持論のもと、現組織へのアンチテーゼでもあった。そうしたところ今度は「指導委員会アドバイザー」なる肩書を付けてくれたので、日本体育協会公認・山岳上級コーチと山岳上級指導員（マスター）資格を返上した。資格の無くなった僕は、さすがにお役御免となったようだ。

生活面はというと、高山に越してきた当初は「何をやっても食っていけるさ」と呑気なものだったが、そこは早期退職の悲哀。なかなかそうもいかず山岳ガイドを始めた。ガイドを始めたら自分の山がやれなくなると思っていたから、それだけにはなるまいと思っていたのに、である。実は高山に越してすぐ、地元のガイド協会から「ガイドなんて年寄りと話ができればやれるし今なら試験も要らないから」とお誘いをもらっていた。しかし僕にもプライドがあったから、話せるだけではないガイドに、と別の協会の検定を受けたのだった。

そんな風に始めた山岳ガイドではあったが、やってみるとなかなか楽しいもので、お客様に喜んでもらうのは冥利に尽きるし、たまにお手伝いするNHKの番組制作の仕事は「映像を創り出すプロ」が相手。山に向き合う、別のプロの仕事に感動さえ覚えるものでもあった。

「自分の山がやれなくなる」かどうかは何と言っても気持ち次第。最も大きいのは、寄る年波でその気持ちが萎えることだろう。谷川の3スラを単独で、と66歳まで4シーズン通っていたが、チャンスをものにできぬまま今や谷川詣でで知り合った仲間と飲む方が良くなってしまった。森田勝が初登攀した3スラは、今やチャンスさえ掴めばそれ程のものではないという。しかしそれをトレースしたいと思う自分がいた。その熱い気持ちは、ひっそりと僕の「記憶」の中にしまわれつつあるようだ。つくづく、歳を取って気持ちが弱くなったなぁと思う。

昨年3月、NHKロケ西穂にて

しかしそれは、別に今に始まったことじゃあなかった。実はこの支部員便りの依頼を受けてから、久しぶりに東海支部の遠征報告書「K2からローツェへ」を引っ張り出してみたのだが、18年前にローツェ南壁に挑戦した時にも、自分の力ではもうダメかと嘆く自分があった。忘れていたが、人間はそうやって、いくつかの節目を経て「今」を生きているものなのだろう。

（以下、当時の日記より）

何回も烈風吹きすさぶ稜線を進む自分の姿を想像し、登れる、と確信した。ただし時間さえあれば。僕はとてもシェルパ並には動けなかった。「スピードこそ命」それを思うにつれ、稜線を進む自分の姿はいつしかただの「夢」になっていくのを感じた。

悲しい「老い」を正視する時が来たのかなあ、もともと一流になれない事は分かっているけど、それに近づく努力はしたのだという自分の歩みが欲しい。（以下略）

いつのことだったろうか
困難を攀じる喜び
それは自分を探す旅だった。
恐怖、飢え、渇き、疲労
容赦ない自然
知らなかった自分の強さ、そして弱さ。
山の自己責任とは
己の弱さを克服する道標
一生懸命
それは生きることだった。

あえて困難を求め
温い日常からの離脱
それは生を納得したい
強い渇望だった

これも同時期に書いたものだが、自宅宛に転記したハガキを同行記者の中日新聞の今村さんが目ざとく見つけ、追っかけ取材のコラム欄に載せてくれたものだ。確かにその頃、僕の山は「渇望」の真っただ中にあり、それを懐深く、温かく育ててくれたのが尾上さん率いる東海支部だった。そして、応援してくれる本当に多くの皆さんのお陰でK2、アッシニボイン、チョー・オユー、そしてローツェ、そんな山に足跡を残させてもらった。その全てを共に登った田辺治は、もういない。

激しい思いが眩しく見えるようになってきた現在、プロガイドとしての活動もあと僅かなのだろうと思っている。僕が主宰する「登山塾」のポリシーは「楽しく・安全に・感動的な登山」なのだが、そのポリシーに丁度、弱くなってきた気持ちが追い付いてきた、と言うべきか。なかなか先見性があったじゃないか、と複雑な思いでもある。

「10年ひと昔」と言うだけあって、東海支部の顔ぶれも変わった。中世古さん、そして寺さんも湯浅さんも亡くなった。そして、僕と青年部長を交代した高橋玲司君が支部長に。その高橋君が苦労して育てた東海学生連盟の皆さんに技術講習をやったり、去年の春合宿は一緒に明神に登ったりもした。これからも少しはそんな風に、自分を育ててくれた東海支部に恩返しができたらいいなと思う。「引く美学」を見失わぬよう、自分に何ができるのかを考えていきたいと思う今日この頃だ。

東海支部俳壇

西山秀夫

めいほうスキー場トップからシールを貼って出発
春立つや目指すは飛騨の烏帽子岳
春光やぶなやカンバの木立にも
早春の飛騨はぐるりと雪の国
春スキーやぶに悪戦苦闘して

2/10余呉湖から湖北・大岳（神又峰）
冴へ返る余呉湖でテント張る夜は
ダム建設が中止になった高時川は活き活きと流れる
滔々（たうたう）と蛇行しながら雪解川（ゆきげがわ）

昭和４０年に廃村の奥川並は石垣のみ残った
浅春やかつては在りし村の跡
標高６００ｍまで登ると雪印のまま降って来た
雪印そのままに見し春の雪
雪の結晶を別に立花（りっか）と呼ぶ
春の山立花舞い落つ湖北かな
春の雪山靴のまま踏み抜きし

余呉湖のレストランで昼食
フキノトウもうてんぷらになったかな
白味噌の香りも高し蜆汁
公魚（わかさぎ）のてんぷらほくっと噛めば美味

＊「公魚」は江戸時代、霞ヶ浦の北にある麻生の藩主が毎年、徳川１１代将軍徳川家斉へ年賀に参上するときに串焼きのワカサギを献上し、将軍家御用達の魚「御公儀の魚」であったことに由来

支部俳壇の刷新について

編集委員　西山秀夫

支部俳壇を刷新しようという声があり、支部員から投句を募り、選句と観賞欄を設けてはどうかという提案がありました。新聞各紙が月曜日に掲載する俳壇の形です。選句とコメントは西山が担当。投句者は支部員と支部友。投句数は１人で３句をはがきに書き、支部宛てに投函してください。

写生を基本として有季定型で、支部報の紙面にふさわしく、山と自然を愛する心を５７５で表現してください。作品の現場を書き添えてもらうと助かります。締切は支部報発行の１ヶ月前までを厳守。添削はしません。掲載できないことがあります。

私の俳歴は39歳で俳句結社「辛夷社」（本部：富山市）に入会して以来、30年。先達の名句約300句は記憶しているはずです。したがって先人の句を模倣したり、もじったりしても分かります。本人にとって佳作だと思われても、どこかで見たなあという句は選びませんのでご了解ください。

作句の現場は山に限りません。自宅で山行の準備をする段階からでも句材はあります。句材はそこら中に転がっています。アイゼンやピッケル、スキー板はゲレンデでなくても良いのです。但し、ＴＶの映像や新聞の記事に題材を得て作ると空想句になります。なるだけ自分と現実に即した句を希望します。季節別俳句歳時記を１冊は買ってざっと眺めておきましょう。季語は詩心を刺激するキーワードになります。愉しい読み物になるようにご協力ください。ご応募願います。

支部友コーナー

◆支部友委員会山行計画（平成31年6月～9月分）

6月2日(日) 奥美濃の大日岳
☆☆ ﾘｰﾀﾞｰ：高松信治 締切：5月12日

6月7日(金) 長野富士見町の入笠山
☆ (山野草観察)
ﾘｰﾀﾞｰ：松本陽子 締切：5月20日

6月8日(土) 伊勢の錫杖ヶ岳
☆ ﾘｰﾀﾞｰ：田中 進 締切：5月19日

6月9日(日) 美濃の納古山
☆ ﾘｰﾀﾞｰ：水野猛志 締切：5月20日

6月12日(水) 恵那瑞浪の屏風山7サミット
☆☆ ﾘｰﾀﾞｰ：榊 將美 締切：5月23日

6月15日(土) 比良山地の武奈ヶ岳
☆☆ ﾘｰﾀﾞｰ：村瀬 恭平 締切：5月26日

＜夏山申し込み連絡先 締切5月31日＞
奥野明美 携帯090-9222-3660
メール tac-okuno@mbi.nifty.com

＜夏山＞6月29日(土)～30日(日)
北アルプス南部の焼岳
☆☆ ﾘｰﾀﾞｰ：金谷正起

＜夏山＞7月6日(土)～8日(月)
北アルプス徳本越から奥又白の池
☆☆☆ ﾘｰﾀﾞｰ：磯部 隆

＜夏山＞7月6日(土) 八ケ岳の編笠山
☆☆ ﾘｰﾀﾞｰ：水野猛志

＜夏山＞7月16日(火)～19日(金)
北アルプスの燕岳～大天井・常念～蝶ヶ岳
☆☆☆ ﾘｰﾀﾞｰ：榊 將美

＜夏山＞7月20日(土)～21日(日)
飛騨山脈の御嶽山
☆☆ ﾘｰﾀﾞｰ：村瀬 恭平

＜夏山＞7月26日(金)～28日(日)
南アルプスの甲斐駒ケ岳 テント泊
☆☆☆ ﾘｰﾀﾞｰ：高松信治

＜夏山＞8月3日(土)～4日 (日)
北アルプスの常念岳
☆☆ ﾘｰﾀﾞｰ：水野 猛志

＜夏山＞8月16(金)～18日(日)
飛騨山脈の大日岳～奥大日岳
☆☆ ﾘｰﾀﾞｰ：村瀬 恭平

＜夏山＞8月23日(金)～25日(日)
南アルプスの甲斐駒ヶ岳（黒戸尾根）
☆☆☆ ﾘｰﾀﾞｰ：磯部 隆

＜夏山＞8月30日(金)～9月1日(日)
北アルプスの唐松岳～五竜岳
☆☆☆ ﾘｰﾀﾞｰ：尾上 昇

＜夏山＞9月6日(金)～8日(日)
頸城山地の火打山～妙高山縦走
☆☆ ﾘｰﾀﾞｰ：磯部 隆

＜夏山＞9月7日(土)～8日(日)
奥秩父の金峰山
☆☆ ﾘｰﾀﾞｰ：村瀬 恭平

9月8日(日) 鈴鹿の烏帽子岳
☆ ﾘｰﾀﾞｰ：今津英一朗 締切：8月19日

次回支部友ミーティング 開催内容のお知らせ

① 第35回(予定)「最新の登山用具について」
4月9日(火)19：00～21：00 支部ルーム
講師：千葉泰丈氏（駅前アルプス社長）

② 第36回(予定) 「2019夏山説明会」
6月11日 (火)
講師：山行ﾘｰﾀﾞｰが12コースを説明します。

支部友会員数
平成31年2月末現在／116名

ﾘｰﾀﾞｰ連絡先

尾上 昇 FAX：052-832-3878
ﾒｰﾙ：onoe@onoe.co.jp

榊 將美 携帯090-7237-4410
ﾒｰﾙ： m.sakaki@minds-consulting.jp

金谷正起 携帯：090-9931-3600
ﾒｰﾙ：kanaya.masaki@rouge.plala.or.jp

村瀬恭平 携帯：090-4186-9876
ﾒｰﾙ：hoshizakari@ezweb.ne.jp

田中 進 携帯：090-9191-8666
ﾒｰﾙ：t-susumu@peace.ocn.ne.jp

今津英一朗 携帯090-2616-7549
ﾒｰﾙ：imazu.eiitirou@maroon.plala.or.jp

磯部 隆 携帯：090-9180-7245
ﾒｰﾙ：takass@yk.commufa.jp

松本陽子 携帯：090-7859-4031
ﾒｰﾙ：yo-kom@nifty.com

高松信治 携帯：090-3156-5268
ﾒｰﾙ：takama2nobu3@yk.commufa.jp

水野猛志 携帯：090-5866-3781
ﾒｰﾙ：r34668@bma.biglobe.ne.jp

山行対象者 支部友会員及び支部会員

申込み方法 ・支部友会員は申込締切日までに、各山行リーダーが示す方法で申し込む。

・締切日　原則山行日 20 日前まで。（締切日を過ぎての参加空き情報はﾘｰﾀﾞｰに直接問い合わせ下さい）
・支部会員は申し込み締切日の翌日以降に、各山行のリーダーへ問い合わせる。
・山行の募集人員を超えない範囲で、支部会員の参加申し込みを受け付ける。
・＜夏山＞については指定の連絡先へ

会員の広場

同好会紹介コーナー

スケッチクラブ　　村中征也

第5回作品展　盛況

ご鑑賞有難うございました !!

第5回作品展を、2月15日（金）～20日（水）に名古屋市東区の「市政資料館」で開催しました。

15名31点の作品は、会員がチャレンジした1年間の成果で、支部員の皆さんや多くの方に観て頂き、厚くお礼を申上げます。

作品飾り付け後　全員で

スケッチクラブが出来て6年、作品展は5回を数えますが、「皆さん上手くなりましたね」「ユニークで楽しい絵が多いですね」とのお言葉、絵に興味をお持ちの方が多いことが、励みになりました。

市政資料館利用は3回目ですが、旧高等裁判所の建物を活用しているので、独特の建物・施設が観光コースに選ばれており、「ご芳名録」には、東京や千葉からの名前もありました。

16日（土）の午後には、3階の正面階段で、「セントラル愛知交響楽団」の3人によるコンサートが開かれ、「絵画と音楽」を同時に楽しんで頂けました。

スケッチクラブは、会費ゼロの気楽な同好会で、絵と山を合わせて楽しめます。春夏秋のスケッチ旅行は、支部員の方なら誰でも「試し参加」して頂けますので、気楽に声を掛けて下さい。

代　表…石田好子
事務局…村中征也・武内喜代子

個展パネル前で

個展併設　『百人一首とスケッチの旅』

一昨年、百人一首を現代語と英語・ドイツ語に翻訳することを思い付きました。作者・歴史・地理等多岐に亘る調査・勉強が必要な作業でしたが、折角だからと、歌に詠まれた場所・作者縁の土地をスケッチしてみました。

百か所の旅は、仙台から山口まで1年半に及びました。この成果を本に纏め、昨年9月に刊行出来ましたが、原画100枚を捨てるのが惜しくて…幸い、隣室が空いていたので、個展を併設させて頂きました。

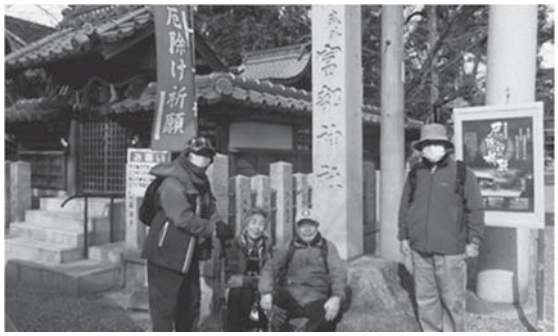
「これは珍しい」「前例がない」と多くの方の声を頂きました。百人一首を手にされた方が多いことも嬉しく、観光地選びの参考にもして頂けそうです。作品展との併設で相乗効果も頂き、支えて下さった多くの方に厚くお礼を申上げます。

古道塩の道同好会　　山中光子

遠くて長かった街道歩きも一段落し、これから探索する場所も、他の中馬街道にするか？もしくは距離の遠い静岡にするか？もしくは別の所と色々迷っていたが、まずは自分達が住む地元を調べてみようと動き出した。名古屋市内も養老元年（717）には熱田台地、御器所台地、笠寺台地等を除き、ほとんどが海だった。8世紀から12世紀にかけて海面の上昇が進むが、愛知県西部の海抜ゼロメートル地帯は完全に海

となってしまい「津島」「枇杷島」「長島」等は完全に島だったようです。海があれば「塩」が採れる。塩を運ぶ古道、名古屋市内だけでも色々あるが、まずは塩付街道の探索から始める。「星崎の塩浜」と言う尾張名所図絵が残り「前浜塩」とブランドが付いていた。前浜塩も全盛期は江戸時代初めがピークで中期を過ぎると、瀬戸内海からの安く大量の塩に押され衰退してしまったが、私達は当時の古道を調べる事にした。

前浜塩は、諸説があり笠寺台地、富部神社、松本道標の3か所に集められ、それぞれの地に向かった。まずは「笠寺観音」に行くと、たまたま六の市が行われており露店を覗く。役行者の祠があり、像は見えないが、郷土史を読めば、役行者は一本歯の下駄を履き活動するが、ここだけは二本歯の下駄。宮本武蔵もここに滞在。



富部神社

笠寺観音から松巨島と呼ばれた「富部神社」へ。富部神社は江戸時代、松に覆われた大きな島とみられ「松巨島(まつこじま)」と呼ばれていた。古代台地の周辺は海で「年魚市潟(あゆちがた)」と言い、海を広範に眺めることのできる景勝の地で「愛知」の地名の起こりの地とも言われている。周りは新しい住宅街だが、神社に向かうには徐々に高度を増し、確かに山の上と言っても良いほどの高台にある。ここでは消火訓練の終わった所へ参詣。

松本道標

あゆちの水

その後は少し戻り「松本道標」初めて探した時は、駐車中の車の影。近くの人に尋ねたら、これですか？と車をどけてくれたら鎮座していた。住宅街の片隅でポツンと建っている。ここは塩付街道、鎌倉道、松本道，新田道が交わる地点で東海道、知多郡道に繋がる道で間違わないように建てられた。道標の奥は行き止まりだが本来は秋葉社に繋がる鎌倉街道。松本道標から名鉄「本笠寺」駅を道なりに超え桜駅近くには桜神明社がある。そこで踏切を渡り、東宝寺前の道を進めば桜本町の交差点に出る。交差点を渡り東方向に進む。二本目の道を北へ直進。住宅街にもかなり年代のたった巨木を見る。桜神明社も古墳の上に立っていたが、途中にある鳥栖神明社もやはり古墳の上に神社が建っている。先に進むと秋葉神社がある。松本道標から行き止まりになっていた道の先がかなり離れているが、この秋葉神社ではないだろうか？

建物が多く、道が見つけにくかったが平子1丁目の「塩付橋」を渡りその後幹線道路221号へ出る。萩山中学校の前を通り瑞穂競技場の前に出る。広い競技場の端を進み、右に少し登る道がある。「あゆちの水」のあゆは湧き出る事を意味する古語で、豊富な湧水が旅人たちの喉を潤した事は間違いないと思われる。ここは琵琶の名手である、太政大臣藤原師長にちなみ師長町と昭和7年町名が施行。

次回はマンションの立ち並ぶ町の中、ポイントとなっている「左右田橋」を渡り、先へと進む。

委員会報告

【自然保護委員会】

ラオス国における植樹と間伐

2010年、国連で2011年度から2020年を生物多様性の年と定めた。国土交通省、環境省、農林水産省は連携して、グリーンウエイブ活動を展開している。ちなみに井藤はこの活動の愛知県担当でもある。

国土緑化推進機構では、アジアの国に植樹することになり、日本山岳会高尾の森づくりの会、ラオスプロジェクトチームが2011年、植林プロジェクトを開始。2014年から、間伐を加えたプロジェクトに衣替え、2017年度から、高尾グリーン倶楽部で継承している。

ラオス国とは、東南アジアでベトナム、カンボジア、タイ、ミヤンマー、中国に囲まれたメコン川中流域の国で、治安はよく、日本に友好的ある。面積は日本の本州程度、人口は600万人、ひとりあたりの国民所得は1400米ドル。発展途上国でも最貧レベルではあるが最近の経済成長は高い。

森林現況と森林政策。熱帯モンスーン地域(熱帯雨緑林)で夏が雨期、冬が乾季。1940年まで国土の森林割合は7割の森林大国であったが、焼き畑の拡大で4割まで低下している。ラオス政府はこれを、7割に戻す方針で。国土の約5割は焼き畑などの潜在森林と考えられる。国民に植林を推奨しているがなかなか進んでいない現状である。国の政策に合致しているとして、歓迎された。

間伐作業を終えた場所にて集合写真、明るい森林となる

植樹プロジェクトの経過

項目	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	計
植栽面積(ha)	5.0	5.0	5.0	2.5	2.5	2.5	3.0	3.0	28.5ha
植栽樹種(種)	11	13	14	10	11	10	9	9	19 種
植栽本和	6700	6600	6200	2800	2800	2800	3300	3300	34500
植樹参加者	31	30	35	20	20	14	14	12	162 人
ラオス参加者	70	100	115	100	160	180	107	153	985 人
間伐面積(ha)				2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	10ha
間伐ツアー参加者(人)				25	24	33	27	20	129 人

植栽樹種

マメ科　シタン、アフゼリア、ビルマカリン。
クスノキ科　ノタフオーベ。
フタバガキ科　メラワン、アピトン、ホワイトメランチ。
ジンチョウゲ科　シャムジンコウ。
クマヅラ科　チーク。
センダン科　マホガニー。
キョウチクトウ科　ミルキーワイン。など

間伐の実施

ラオス国にかつてあった美林の復元を目指して巨樹の森づくりを推進するためには間伐の手法導入が有効との認識で、森林研修センター管轄の植栽後20年程度経過した森林を対象にラオス大学と協働し、毎年20haの試験間伐を.実施することになった。

プロジェクトを通じてラオス大学林学部は技術研修を始めた。日本の伐木技術の伝承を図るため、現地作業員に対するチエンソー安全技能講習を実施した。2017年度は日本側から8名、ラオス大学林学部学生及び教師11名、国の営林局職員4名、村人4名の計27名が参加した。

この活動に参加して思う事

活動が地元住民の方々に暖かく受け入れられている。ラオス政府も毎回、副大臣や局長級の方が会ってくれ感謝の言葉をいただいている。

森林局に移管してからは、植樹に森林局長、副局長が参加し森林局職員、地方の郡、県の職員も多数参加。国を挙げて行っている植樹運動のモデルとして、高い評価を受けている。

間伐についてはラオス大学林学部が授業の一環で共同の作業をおこない、間伐の意義を理解してくれている。

活動に参加するために、日ごろから、体調に留意し、12回目のラオスの地を踏みたいと考えている。

自然保護委員長　井藤恵美子

【山行委員会】

■平成30年9月～31年2月の支部山行実施状況

日程		山域	山名等	参加人数	リーダー
9月	22日	高島トレイル	三重ヶ嶽ほか	中止	市川
	26日	奥美濃	左門岳	5人	石井
10月	5～7日	中央アルプス	空木岳ほか	中止	大矢
	7～9日	南アルプス	鳳凰三山	18人	市川
	7～9日	黒部川渓谷	下の廊下	中止	石井
	12～14日	大菩薩連嶺・奥秩父	大菩薩嶺ほか	中止	杉村
	26～27日	金剛山地	金剛山ほか	3人	伊藤
11月	3～4日	飛騨山地	位山三山	11人	市川
	7～8日	上毛三山ほか	妙義山ほか	5人	石井
	11日	鈴鹿北部	天狗堂ほか	10人	吉田
	14～15日	鈴鹿	谷尻谷遡行	3人	山田
	23日	高島トレイル	武奈ヶ嶽	21人	市川
12月	5日	高山市南方	高屹山	8人	石井
	8～9日	熊野古道(伊勢路)	荷坂峠道ほか	20人	林
	16日	京都トレイル(北山)	永井山ほか	15人	天野
1月	4～5日	天子山地	竜ヶ岳ほか	7人	栗木
	13日	八ヶ岳	硫黄岳	9人	稲葉
	16日	尾鷲北方	天狗倉山ほか	8人	石井
	20日	湖北	椿井嶺	中止	伊藤
	26日	駿河	浜石岳	3人	杉村
2月	2日	湖北	己高山	7人	吉田
	5日	奥美濃	母袋烏帽子岳	7人	鈴木
	9日	高見山地	高見山	中止	石田伸
	13日	尾鷲南方	亥谷山	8人	石井
	17日	飛騨山地	猪臥山	中止	伊藤
	23～24日	美ケ原	王ヶ頭	10人	稲葉

※支部山行ホームページで参加者を募集していますので、ご覧ください。

山行委員会委員長　鈴木愼吾

【東海Youth】

東海Youthでは昨年12月22日(土)に猿投山で読図訓練をおこなった。過去にも読図山行を実施したことはあったが、今回は山田副支部長に事前設置していただいた目印を順番に探していく本格的なものだ。参加者8名は3つの班に分かれ、小雨降る絶好の(?)コンディションの中、半日かけて猿投山をさまよった(笑)。山岳遭難のおよそ4割が道迷いである。今回の山行で、低山や里山における現在地の把握がいかに難しいかを実感できたかと思う。

午後には雨もあがり、終了後は猿投森づくり

の会の餅つきに参加させていただいた。メンバー全員力強く杵を振るい、つきたて餅をお腹いっぱいごちそうになった。今後も他の委員会のみなさんと積極的に交流していきたい。

東海ユース代表　服田康弘

【ボランティア委員会】

春のボランティア委員会

2019年春の主な委員会行事が2月度委員会で決定いたしました、お知らせいたします。支部員、支部友員関係なく興味のある方、是非ご参加ください。

①ＳＯＮ支援登山（知的障がい者支援）
　美濃高賀山　4月21日(日)
②春のブラインド登山(視覚障害がい者支援)
　伊勢白猪山　5月11日(土)
③タンポポ登山（少年補導委託登山）
　朝明茶屋　6月6日(木)・7日(金)

この支部報がお手元に届くころでも間に合いますので、ご支援いただける方、問い合わせ等、前田までメールでご連絡ください。

Email/maedaiq@gmail.com

ボランティア委員会委員長　前田隆久

【技術向上委員会】

2 月 23 日名市大病院さくら講堂にて、金田正樹氏を講師に「登山で起こる低体温症と凍傷」の講演会を行いました。

雪国でも日常生活の中で殆ど遭遇しない疾患なのですが、低温環境にさらされる登山においては避けて通れない必要知識です。「凍傷」を理解し、それに至る大きな要因である「低体温症」について、我々が知り得ない実態や発生メカニズム、予防方法を学ぶことができました。当日の配布スライド資料が若干残っていますのでご興味のある方は技術向上委員会に問い合わせください。　技術向上委員長　片岡泰彦

会　務　報　告

【2018 年 11 月常務委員会】

日時：11 月 28 日(水) 19 時 00 分～20 時 40 分

１．支部長挨拶(高橋)：森の音楽祭、成功裏に終了した。カナダから一時帰国した山田氏には登山学校受講生等に講演いただいたが大変いい内容であった。今週末は晩餐会があり、全国の支部連絡協議会も開催される。提案内容などあれば本日の委員会の中でお願いしたい。

２．委員会報告

①支部友委員会(金谷)：10 月～12 月の山行及び 12 月～4 月の支部友ミーティングについて報告。

②山行委員会(鈴木)：11 月～3 月の山行について報告。登山計画書のチェックリストについて意見交換した。

③亀の会(加藤氏欠席につき山田氏)：活動報告にいては資料で説明した。

④猿投の森づくり委員会(小川)：10 月～12 月の活動について報告。森の音楽祭が無事終了、12/22 の年納餅つき大会の参加要請あり。

⑤東海ユース(服田氏欠席につき山田氏)：11 月～12 月の活動について報告。11 月には実際に御在所の岩場で訓練など行った。

⑥支部報編集委員会(星氏欠席につき尾上氏)：支部報 No. 156 について原稿未提出の委員会は早急に原稿の提出を。

⑦青年部(鎌倉)：カナダより一時帰国した山田氏にビレイ等講習を受けた。

⑧岳連(喜田)：先日の総会に委員長交代した。今年も冬山プロジェクトを企画し、早速活動を始めている。今後共装備について寄付をお願いしたい。→必要な装備については支部で購入してもいいのでは。→了承。

⑨登山学校運営委員会(榊)：中日登山教室については 10 月～11 月の講座が終了。受講生の減少もあり 3 月末で閉講を検討中。机上講座は中級向けに「冬山装備」の講習を行った。12 月に外部講師により「山の気象」を実施予定。

⑩自然保護委員会(井藤)：モニタリング 1000 調査についてカメラ使用予定の問題点報告。

⑪ボランティア委員会(前田氏欠席につき尾上氏)：11 月までの活動は無事終了。委員会では現在 4 つの事業を行っているが、支援者が減少している。今後新たに募集検討予定。

⑫遭難対策委員会(山田氏)：登山計画書のチェックリストについていくつか改善要望について報告。

⑬森の音楽祭実行委員会(毛利)：音楽祭の実施状況の報告があった。

⑭デジタルメディア委員会(井上)：ルームのネット環境の見直し完了したとの報告があった。

⑮技術向上委員会(片岡)：11/3～4 の国立登山研習所主催サテライトセミナーには支部から 25 名参加。12/8 に気象講習会、2/23 に凍傷及

びファーストエイドの講演会実施予定。
⑯その他(高橋)：各委員会活性化のため、新入会員等にわかりやすいよう、委員会案内を作成し配布したい。→ＪＡＣ東海ガイド 2019 に入れては。→了承。全委員会に、3 月末日までに原稿提出を依頼。
出席：高橋、佐野、片岡、山田、尾上、市川、鈴木、前田、箕浦、金谷、小川、井上、井藤、毛利、榊、山内、鎌倉、喜田

【2018 年 12 月常務委員会】
日時：12 月 26 日(水) 19 時 00 分～19 時 30 分
来賓紹介（尾上）：本部総務委員長の今田氏、ネパール山岳協会会長のサンタ・ラマ氏と元日本山岳会副会長で、日本山岳協会会長、現 HJ 理事長の神崎氏の 3 名の来賓の紹介。常務委員会終了後に交流会を開きこれに参加。
１．委員会報告
①総務委員会(毛利)：第 35 回全国支部懇談会が来年の 5 月 25 日から 26 日に栃木支部で開催される。東海支部では 60 周年の記念イベントが控えており、その際に支部懇の担当を引き受ける事になり、沢山の人に参加してほしい。
②会計(市川)：大坪さんより 100 万円の寄付を受けたとの報告あり。
③山行委員会(鈴木)：配布した資料に基づき、山行状況報告。リーダー会議は 3 月 15 日に行う予定。
④支部友委員会(金谷)：11 月の山行報告、会員異動、山行計画について議事録の提出と報告があった。
⑤東海ユース(服田)：12 月の会員動向、山行報告、山行計画について議事録の提出と報告があった。
⑥支部報編集委員会(星)：支部報第156号は1月早々に手元に届くよう送付された旨報告。
⑦学生連盟(鎌倉)：第 2 回目の冬山計画の予定もあり、ビーコン 3 台の購入を計画している。当購入計画は今回、正式承認となった。
⑧登山学校(榊)：中日登山教室については、生徒数の減少し閉講したい。－ 全会一致で承認。
⑨遭難対策委員会(山田)：リスクチェック表の提出は 11 月 28 件。4 月から正式運用を計画している。個人山行についは１ヶ月前までの計画書提出義務は除外する予定。
⑩技術向上委員会(片岡)：2019 年 2 月に金田正樹先生の「登山で起こる低体温症と凍傷」と題した講演会、3 月には村越真先生の「読図とナビゲーション」と題した講習会を予定している。
出席：高橋、佐野、山田、片岡、尾上、天野、金谷、鈴木、小川、市川、鎌倉、榊、星、服田、石田、井藤、前田、井上、山内、喜田、毛利、

【2019 年 1 月常務委員会】
日時：1 月 23 日(水) 19 時 00 分～20 時 30 分
１．支部長挨拶(高橋)：先日支部新年会が盛大に行われた。花谷氏の講演も好評。講演内容としては若手育成の活動を紹介され、山岳会もそういった活動をしていかないと、登山界は衰退していく。支部としても将来を見据え、各委員会は来年度の事業計画や人事にはこの視点で取り組んで欲しい。
２．委員会報告
①総務(毛利)：来年度の支部行事について説明。各委員会行事開催にあたっては支部行事と重ならないよう計画いただきたい。
②支部友委員会(尾上)：12 月～2 月の山行及び 12 月～4 月の支部友ミーティングについて報告。2/12 支部友ミーティング「ナイロンザイル事件」はオープン参加。
③山行委員会(鈴木)：1 月～3 月の山行について報告。3/15 リーダー会議を実施予定。来年度のリーダーについて新たに 1 名依頼中。山行についてＨＰに載せるとすぐに満員となってしまうため、予告期間を設けるように変更した。
④亀の会(加藤)：2018 年の活動及び 2 月～5 月の山行予定について報告。会員の年齢構成について、ほとんどが 70 歳以上で、持病等で山行に参加が難しくなってきた会員も増えている。そういった方も参加できる企画を 3 件行った結果、山行から遠ざかっていた方の参加を得られた。
⑤猿投の森づくり委員会(小川)：1 月～2 月の活動について報告。緑化推進機構専務理事、常務理事、担当課長などと打ち合わせ実施済。森の音楽祭の事業費については「緑と水の森林ファンド」に申請するようアドバイスを受けた。
⑥森の音楽祭実行委員会(毛利)：『緑と水の森林ファンド』への事業申請をして上で、2019 年度も音楽祭を実施していきたい。→了承。
⑦東海ユース(服田)：1 月～3 月の活動について報告。次年度の活動方針について、テント泊の拡大、支部行事へのより多くの参加、ユース以外の方も参加できる山行等企画する。
⑧支部報編纂委員会(星)：第 157 号の掲載記事

について配布された資料を予定している。
⑨青年部(高橋):青年部という名称について入会のハードルを上げてしまっているのではという議論あり。→この点についてもっと議論しても良いのでは。
⑩登山学校運営委員会(榊):来期の登山学校のスケジュールについて2月にはカリキュラム確定予定。また、これまでの3年間を第Ⅰクールとし、第Ⅱクールについても計画を進めている。
⑪遭難対策委員会(山田氏):12 月の提出登山届のうちチェックリスト添付は 29 件でうちグレード 3 は 2 件。審査のため今後グレード 3 の計画書にはルート図を添付いただきたい。審査機関を設置するため山行・支部友・登山学校の各副委員長にお願いしたい。支部の遭難対策規程は作成中。
⑫学連(喜田):冬山プロジェクトとして現在 11 名でトレーニングを行っている。来月は奥美濃でラッセル周回山行を予定。
⑬自然保護委員会(井藤委員長欠席のため資料のみ配布)
⑭ボランティア委員会(前田):来年度の事業について配布資料で報告。
⑮技術向上委員会(片岡):支部報に 2 月～3 月の講演について掲載した。
出席:高橋、佐野、片岡、山田、尾上、市川、鈴木、服田、前田、箕浦、星、小川、毛利、石田、榊、加藤、喜田

総務委員会　毛利邦男　記

ルー ム 日 誌

１２月

3 (月) 支部友委員会
4 (火) 県岳連
5 (水) 青年部/TNCC(同好会)
6 (木) 写真展委員会・東学連
7 (金) 古道塩の道
8 (土) 登山学校机上講習 (服田) 9:00～13:00
10(月) 登山学校運営委員会
13(木) 自然保護委員会
16(日) 東海ユース
17(月) 図書委員会、読図会
18(火) ボランティア委員会
19(水) 山行委員会/総務委員会
正副支部長会議
20(木) 東海学生連盟
22(土) 登山学校机上講習 (服田) 9:00～13:00
25(火) 猿投の森運営委員会
26(水) 支部報発送/常務委員会
27(木) 技術向上委員会

１月

7 (月) 支部友委員会
8 (火) 県岳連
9 (水) 青年部　TNCC(同好会)
10(木) 写真展委員会/自然保護委員会
11(金) 古道塩の道
12(土) 東海ユース
15(火) ボランティア委員会
16(水) 山行委員会/総務委員会/
正副支部長会議
17(木) 登山学校運営委員会/東海学生連盟
21(月) 支部報編集委員会/図書委員会、読図会
22(火) 猿投の森運営委員会
23(水) 常務委員会
24(木) 技術向上委員会
25(金) 亀の会

２月

1 (金) 古道塩の道
2 (土) 東海ユース
4 (月) 支部友委員会
5 (火) 登山学校運営委員会
6 (水) 青年部/TNCC(同好会)
7 (木) 写真展委員会
8 (金) 山行委員会
12(火) 支部友委員会ミーティング
13(水) 県岳連
14(木) 自然保護委員会
15(金) 東海学生連盟
18(月) 図書委員会、読図会
19(火) ボランティア委員会
20(水) 山行委員会/総務委員会/
正副支部長会議
21(木) 技術向上委員会
23(土) 県岳連
26(火) 猿投の森運営委員会
27(水) 常務委員会

会員異動

入会:安井　達(16423)　澤田信也(16422)
南　聡(16446)
退会:毛利　仁(15264)　山口順子(14902)
岡島慎治(15915)　奥村明徳(16271)

INFORMATION

【総務委員会からのお知らせ】

【平成31年度支部総会・懇親会のお知らせ】

支部総会を下記日時と場所にて開催します。

期　日：5月19日(日)
時　間：総会・来賓講演：午後4時～
　　懇親会：　総会・講演終了後
場　所：総会・講演：OMCビル4階講堂(412)
　　懇親会：　東海支部ルーム
会　費：懇親会参加者2,500円程度
　　(学生：1000円)

※同封した返信用ハガキに総会･懇親会出欠を明記の上、速やかにご返送ください。尚、総会欠席の方は委任状のご提出も併せてお願いいたします。

【第7回夏山フェスタ開催のお知らせ】

第7回夏山フェスタが下記要領にて開催されます。東海支部も全面的にバックアップしていますので、お誘い合わせの上ご来場ください。

日　時：6月8日（土）～9日（日）
場　所：ウインクあいち7F・8F
主　催：夏山フェスタ実行委員会
事務局：中部経済新聞社　事業部
イベントの内容：

① 山に関するセミナー、著名人の講演会
　タレント工藤夕貴さん、運動生理学山本正嘉さん、国際山岳医師大城和恵さん、花谷泰広さん、モンベル辰野勇さんらの出演が内定しています。
② 登山用品メーカー、関連団体、自治体などによるブース出展・東海支部も相談コーナー他の出展を予定。
③ 山小屋・山岳関連団体の相談コーナー
④ 山岳写真展など。

※詳細は、別紙チラシをご覧ください。

総務委員長　毛利　邦男

【写真展実行委員会からのお知らせ】

写真撮影山行へのお誘い

写真展実行委員会では、下記の写真撮影山行を企画しています。是非ご参加ください。

1. 3月19日（火）～20日（水）　千畳敷
　世話人　坂本孝　午後3時ロープウェイホテル集合　名鉄バスで、ロープウェイまで込みの切符あります。
2. 4月26日（金）　御在所山　日帰り
　アゼリア10時集合　世話人　中野八千代
3. 5月7日（火）～8日（水）1泊2日
　西穂高（独標）　西穂山荘泊　星が丘集合
　自動車利用　世話人　井上寛之
4. 6月15日（土）～16日（日）　涸沢
　涸沢ヒュッテ泊ほか　世話人　井上寛之
5. 7月13日（土）～15日（月）　栂池～白馬
　世話人　蟹井れい子
6. 7月19日（金）～21日（日）　蝶ヶ岳
　蝶ヶ岳ヒュッテ泊ほか　世話人　山内薫

各撮影山行企画については、世話人より詳細をお知らせします。　参加ご希望の方は、委員長　山内薫までメールでお知らせください。

e-mail　yamauchi@orihime.ne.jp
写真展実行委員長　山内　薫

【猿投の森・ヤマザクラ観桜会のお知らせ】

恒例となりましたヤマザクラ･観桜会が下記要領にて開催されます。締切日か迫っていますのでお早めに申し込みください。

期　日：4月13日（土）10時～13時
場　所：猿投の森 三つ又広場
　　(瀬戸市上山路町)
受　付：9時30分 中電瀬戸変電所前
　　(地図など折込参照の事)
プログラム：10時 開会、演奏会（音のひと＊ゆうなwithみずのお狩場太鼓）
　　10時45分 ヤマザクラ観桜会
・希望者には午後、環境林として整備している林内をご案内します。
申込み：zukasamakatsuoo@yahoo.co.jp(大塚)
猿投の森づくりの会　小川　務

編集後記

この冬は積雪量の少ない年のようである。アイスクライミング中の事故も複数聞いた。気候変動による平均温度の値が上昇している証拠であろうか。自然の厳しさに対する感覚を研ぎ澄ましていないと対処の遅れや油断が生じる。

春山登山にも安全第一で行きたい。

星　一男

海外トレッキングのパイオニア！

世界の山旅を手がけて48年

アルパインツアーサービス株式会社

“山仲間でオリジナルツアーを企画しませんか？”

説明会にお伺いします。お気軽にご相談下さい

名古屋 〒450-0002 名古屋市中村区名駅3-23-2（第3千福ビル3階） 052-581-3211

アルパインツアー 検索 www.alpine-tour.com

ATLAS TREK

ハイキングから本格的な高峰登山までお気軽にお問い合わせ下さい。

観光庁長官登録旅行業第 1167 号 /（社）日本旅行業協会正会員

株式会社アトラストレック

【東京本社】〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-10-5 ハツ橋ビル 301
TEL:03-3341-0030 FAX:03-3341-9200 E-Mail:info@atlastrek.co.jp
【大阪支店】〒530-0012 大阪市北区芝田 2-8-7 八木ビル 4 階
TEL:06-6147-8031 FAX:06-6147-8032

ホームページ http://www.atlastrek.co.jp/

SINCE 1975

mont·bell

ウエア・ギアに
遊び心もそろえて
お待ちしています

アウトドア用品は、
機能的なアイテムが豊富に
そろうモンベルストアへ。

豊橋店 2019年4月17日オープン	愛知県豊橋市飯村町西山（※番地未定）
名古屋店	愛知県名古屋市中区栄3-18-1ナディアパークロフト 6階
ららぽーと名古屋みなとアクルス店	愛知県名古屋市港区港明2-3-2 ららぽーと名古屋みなとアクルス 1階
新静岡店	静岡県静岡市葵区鷹匠1丁目1-1新静岡セノバ 4階
ららぽーと磐田店	静岡県磐田市高見丘1200ららぽーと磐田 1階
浜松店	静岡県浜松市東区上西町985-1浜松プラザウエスト内
長久手店	愛知県長久手市片平1丁目901
各務原店	岐阜県各務原市那加萱場町3-8イオンモール各務原 2階
長島店	三重県桑名市長島町浦安368 三井アウトレットパークジャズドリーム長島 2階
鈴鹿店	三重県鈴鹿市庄野羽山4-1-2イオンモール鈴鹿 1階
モンベルルーム御在所店	三重県三重郡菰野町大字菰野8625（御在所ロープウエイ前）

豊橋店・名古屋店・長久手店・長島店では、アウトレット商品も取り扱っています。

【お問い合わせ】モンベル・カスタマー・サービス 0088-22-0031/TEL.06-6536-5740
※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

企画・デザイン・印刷

株式会社 ASAI 隆文社

株式会社 浅井隆文社

〒461-0044 名古屋市東区矢田東1番22号
TEL (052)719-0677 FAX (052)719-0678
E-mail : info@asai-rbs.co.jp

♣♣♣♣♣♣♣ OMC ♣♣♣♣♣♣♣

住いのコンサルタント

㈲ 富士見企画

〒460－0014
名古屋市中区富士見町８番８号

♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣

建設業許可を取りたい、日本国籍を取得したい（帰化）、遺言を公正証書で作成したい、戸籍謄本や除籍謄本を代行取得して欲しい、任意成年後見の相談をしたい、会計記帳を頼みたい等々

ご相談は行政書士の西山秀夫へ

〒460-0002名古屋市中区丸の内3丁目21番21号
（地下鉄・久屋大通駅から2分の）丸の内東桜ビル1004号室
TEL：090-4857-9130
URL： http://www.nygs-office.com/

㈱ワークシステムサービス

一般社団法人 日本自動車運行管理協会
一般社団法人 中部地区自動車管理業協会

・一般貸切旅客事業 ・車両運行管理事業
・愛知県知事登録旅行業 ・労働者派遣業
・ビル清掃管理事業 ・介護支援事業

〒465-0021 名古屋市名東区猪子石３丁目113番地
TEL 052（779）8777㈹ FAX 052（779）0031
http://www.work-system.co.jp/